



プログラム冒頭、松原副学長から、開会のご挨拶とともに発表する11名の高校生にエールが送られた。



MCを務めた人間・コミュニケーション学科1年の永井愛佑美さん(左)と同学科1年の飯塚航さん(右)。

はしもと あいり  
橋本 愛里さん(智学館中等教育学校5年生)  
"What Do You Want to Be in the Future"



自動販売機とセルフレジの発明など、テクノロジーの向上により人間が仕事を失うことを予測し、発表者が思いついたユニークなキャリアについて熱く語った。技術が進めば進むほど、かつて人間が行っていた仕事がロボットに与えられることになる。橋本さんは「ロボットカウンセラー」という、私たち人間に、自分のニーズにあったロボットを紹介して、使い方を教える仕事に就きたいと発表した。

いしい ふみな  
石井 史奈さん(常磐大学高等学校1年生)  
"To Stop a Negative Chain"



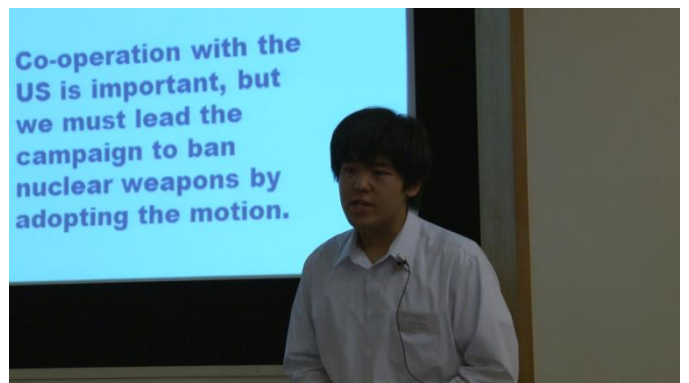
発展途上国の向上を妨げる「Negative Chain」(負の連鎖)を断ち切るためには、教育が必要だと主張した。学校に通えない子どもや、読み書きのできない人をサポートする「世界寺子屋運動」などの活動に取り組むことの重要性を説明した。

ほし ゆうか  
星 優花さん(茨城県立日立第一高等学校1年生)  
"The Importance of Education"



発展途上国における教育の重要性について、マララ・ユスフザイのスピーチからインスピレーションを得て、教育で発展途上国を助ける3つのアイデア①現地の大人に先生のトレーニングを行うこと、②現地の人が自立的に生活できるようにワークショップを行うこと、③現地の大人のためにも授業を設けること—を述べた。

かんの たかのり  
菅野 孝則さん(茨城県立緑岡高等学校1年生)《3位》  
"Nuclear Weapons Ban Treaty – Why Japan Says “No”?"



アメリカの核の傘が必要など、日本が国連核兵器禁止条約に参加しない政治的な理由を分析し、日本がアメリカと協力し続けながら、核兵器のない世界を作るための活動の先頭に立つべきだと訴えた。

かわさき りこ

川崎 莉子さん (茨城県立水戸第二高等学校1年生)  
"Down with Racial Discrimination"



グローバル化における人種差別をテーマに、トランプ大統領の「イスラム教徒のアメリカ入国制限」に対する抗議として、イランの女優が今年のオスカーアカデミー賞に参加しなかった出来事を取り上げた。もし自分がその女優だったら、アカデミー賞に参加し、その場を利用してどのような発言をしたのか、実際に演じてアピールした。

しみず ひなた

清水 陽向さん (水戸葵陵高等学校1年生)  
"Never Forget"



電気や水、食べ物が突然なくなった不便さ、父親がガソリンスタンドで半日も給油を待つ異常な光景など、東日本大震災での経験に触れ、それ以降、当たり前に入ることが決して当たり前のことではない、という気づきを得たと表情豊かに語った。

とりい ななほ

鳥居 那菜穂さん (茨城県立水戸第二高等学校1年生)  
"The Role of History"



考古学に興味を持つ立場から、古代遺跡を守る大切さを訴えた。イスラム国に破壊されたニムルドの古代遺跡や、沖縄にあるチビチリガマ洞窟が荒らされた事件に触れながら、歴史を知ることが歴史遺産を守ることにもつながると、古代遺跡の知識を広げる学芸員になる将来の夢を披露した。

まつもと まゆ

松本 茉優さん (常磐大学高等学校2年生)《2位》  
"What is a Good Teacher?"



アメリカと日本の教育の仕方を、授業の構成、宿題の量といった視点から比較しながら、発表者がアメリカの学校に通った経験を基に、アクティブラーニング(能動的な学習)の有益性について話した。

たからだ たみ

宝田 多美さん (神奈川県立茅ヶ崎高等学校2年生)  
"How Hard is it for Japanese whose First Language is not Japanese"



発表者の母は、20歳の時日本に移住した日系ポリビア人。日本で生活していく中で、日本語は話せるけれども読み書きができないことから母や家族が直面した困難について語った。学校や公共施設の多言語化、やさしい日本語の普及など、日本語を母国語としない人々を助けるための方法を提案した。

わたなべ ゆうか

渡邊 侑香さん (鶴沼高等学校2年生)《3位》  
"Japanese Students are not Shy and Quiet"



「日本人の学生はシャイだ」というステレオタイプの考えに疑問を投げた。日本では一般的に、授業中はおとなしくするよう指導されているが、授業以外の場面で日本人の学生に接しない外国人の人が勘違いしていると指摘。授業をもっとアクティブにすれば、このステレオタイプがなくなるのではないかと提案した。

やじま はな  
**矢嶋 花菜さん** (洗足学園高等学校 2年生) 《1位》  
**"Gender not Sex"**



社会的な性と生物的な性の違いがテーマ。英語のサマーキャンプに参加したとき、プログラム担当カウンセラーや参加者が、自身がトランスジェンダーだとカミングアウトし、このテーマの大切さを初めて意識した出会いを紹介した。日本社会に、LGBTの人々を広く受け入れる素地を作るために、積極的にこのテーマを話す場を増やすことが大切と、流暢な英語で訴えた。



審査時間を利用して、交換留学生 14 名が学校別に出身地や母校を紹介するプレゼンを日本語で行い、大きな拍手をいただいた。



審査結果を待つ間、会場から留学生に活発に質問が投げられ、和やかな雰囲気になりました。



審査員を務めた人間科学部ケビン・マクマナス助教による総評。発表者それぞれ、独自の視点でテーマを深め、質疑応答にもしっかり対応し、例年にも増してレベルの高いコンテストとなったとの評価をいただいた。



審査員を務めた茨城県国際交流員のグロリア・チェンさん(右)から1位の賞状を受け取った矢嶋さん。松原副学長とチェンさんとの記念撮影で笑顔がこぼれました。



発表に参加した 11 名の高校生と審査員、交換留学生の記念撮影。お疲れ様でした！